

宮元遺跡の集落の様相について

神 康 夫

はじめに

宮元遺跡は古代の堀を巡らす沖積地上に立地する平地式集落と考えられる。発掘調査報告書はすでに刊行されているが、紙数・時間的制約から遺跡全体の様相や調査時の所見等をまとめあげ、報告書に掲載することができなかった。今回幸運にも貴重な数頁をいただく機会を得ることができましたので、宮元遺跡の集落様相の一端について若干まとめることとしたい。

1 宮元遺跡の立地

宮元遺跡は、青森市浪岡大字増館字宮元地内に所在する。青森市役所より直線距離で約 23km南西、浪岡庁舎より約 5km南西の地点にある。地形的には津軽平野を北流する岩木川の支流である十川の左岸に位置し、十川の氾濫によって形成された自然堤防上すなわち沖積平野の微高地上と、一部後背湿地上に立地している。遺跡の標高は約 18~ 20mで、現在リンゴ畠及び水田として主に利用されている。

2 宮元遺跡の調査経緯

宮元遺跡は平成 11年度青森県遺跡詳細分布調査で発見・新規登録され、平成 12年度の青森県教育庁文化課（現文化財保護課）による試掘調査で遺跡の範囲や遺存状況が確認された遺跡である（図 1）。そして県営増館地区ほ場整備事業に先立って、平成 13年度には南側の ～ 区を、平成 14年度には北側の ～ 区を青森県教育庁文化財保護課がそれぞれ発掘調査を実施した（図 2）。そこで検出され報告書に掲載された遺構数等は表にあるとおりであるが、土坑として集計されているが住居や井戸と目されたり、溝跡と報告されているが堀跡の可能性もあるものが存在することから、本稿では遺構を再検討しており、表の数量と本稿で扱う数量は異なっていることをご了承いただきたい。

3 宮元遺跡の集落様相

(1) 調査区の状況

平成 12~ 14年度の調査区とその成果は図 2あるいは表のとおりで、～ 区と ～ 区の 2,972 m²を本発掘調査している。なお ～ 区は遺構確認のみ、～ 区は農作物栽培の影響から遺構確認できず分布状況は不明である。遺構の希薄な地区は ～ 区及び ～ 区で、～ ～ ～ ～ 区はやや密度が濃く、～ ～ ～ ～ 区は濃厚な状況であった。検出された遺構の多くは溝と土坑であり、～ ～ 区ではピットが相当数検出された。『浪岡町史』によると増館地区の十川沿いの後背湿地部分は雨が降ると常に湛水したらしく、水田は腰回田こしめぐりたと呼ばれていた。溝跡の検出数が多いのも先人が水をうまく切り回そうとした苦労によるのではないかと偲ばれる。増館地区では昭和 30~ 40年代に一度ほ場整備がなされていて原地形は既に失われているという背景があり、調査開始時はリンゴ畠部分のみが微高地だと考えていたのだが、遺構の分布状況と遺構確認面の土質などを考慮すると、～ 区

～ ～ ～ ～ 区ではピットが相当数検出された。『浪岡町史』によると増館地区の十川沿いの後背湿地部分は雨が降ると常に湛水したらしく、水田は腰回田こしめぐりたと呼ばれていた。溝跡の検出数が多いのも先人が水をうまく切り回そうとした苦労によるのではないかと偲ばれる。増館地区では昭和 30~ 40年代に一度ほ場整備がなされていて原地形は既に失われているという背景があり、調査開始時はリンゴ畠部分のみが微高地だと考えていたのだが、遺構の分布状況と遺構確認面の土質などを考慮すると、～ 区

や 区の大半も微高地上に立地していたことが判明した。

(2) 住居跡等の分布状況

豎穴住居跡・掘立柱建物跡・豎穴遺構と思われる遺構は ~ 区で検出されており、遺跡主体部の一部と考えることができそうである。一方 ~ . 区では住居跡等が検出されておらず、遺跡主体部から外れる区域といえる。掘立柱建物跡は 区で 1 棟、豎穴遺構と推測されるものは 区で 3 棟、平成 12 年度 9 トレンチで 1 棟検出された。

(3) 井戸跡の分布状況

土坑として検出したものの中には、その形態から井戸跡と目されるものが存在する。井戸跡の分布状況は図 3 のとおりで、当然のことながら遺構精査された地区に偏在している。特に 区やや北側に密集している状況があり、 区と 区、 区にも数基程度のまとまりがみられる。

(4) 堀跡の確認状況

3 ケ年の調査で図 5 のように断片的ではあるが、堀跡が微高地を取り囲むように存在しているらしいことが確認された。微高地の北側は、 . . 区、平成 12 年度 8 - 3 トレンチ、 区北西端において幅 8 m 程度と推測される堀跡が検出されている。 区（平成 12 年度 12 - 1 トレンチ）と 区、 区で部分的に遺構確認面から約 1.5m ほど掘り下げたが、いずれも底面は確認できていない。 区では同規模の溝跡と目される黒色土の落ち込みが 2 箇所遺構確認されているが、両者が外周する堀跡と考えるよりも、東側は外周する堀跡で西側は主体部を区画する溝跡（堀跡）の可能性が考えられる。

さらに 区・ 区土橋でも遺跡主体部の微高地から延びてくる幅 2 ~ 3 m の溝跡（断面薬研堀状をなす - 13 溝など）が検出されており、遺跡主体部を区画するこれらのような溝跡（堀跡）がいくつか存在するものと思われる。一方微高地南側は、平成 12 年度 18 - 1 トレンチ、 7 - 1 トレンチ、 区南端（ - 72 溝跡）平成 12 年度 4 - 2 トレンチ、 区東側で同じように堀跡と思われる溝跡が検出されている。幅は遺跡主体部北側と同じ 8 m 程度であるが、 - 72 溝跡では遺構確認面からの深さが約 1.2m であることから北側に比べるとやや浅いようである。

(5) 現地踏査による遺跡付近の状況

現在現地確認できる、遺跡と同時に在住の可能性がある施設は、通路 2 箇所、祠・神社各 1 箇所がある。

通路は微高地北側にある土橋部分と、微高地南東側の増館地区集落に通じる道路部分である。微高地北側は「 区土橋部分」と調査時に呼称していた部分で、微高地と同一面の幅・長さ 8 m 程度の土橋が明瞭に残っている。土橋の付け根にあたる「 区土橋部分」調査区でも溝跡などの遺構が検出されていて、盛土や版築によって造られたものではないようである。微高地南東側の増館地区集落に通じる道路部分は、現在も地元の方々が遺跡主体部に入ってくる際に通行する舗装道路で、 区で検出された堀跡がこの方向に向かっていることが確認されており、地形的にも微高地が狭くなっていることから土橋などの施設が現道下に存在する可能性がある。

祠・神社は、微高地の北西部で 区に隣接する地点にある小さな祠と、本遺跡の南側、増館地区の南西部にある八幡宮である。小さな祠は石神神社と呼ばれ、境内に横たわる大石が御神体である。『女鹿澤村誌』によればこの大石は、十川乱流時代に渡河のため浅瀬の目印にしたものという。この大石については、地元の方からも本遺跡の北西部付近にその昔船着き場があつて船止めの石があつたとの話を伺った。本遺跡北側にある十川はゆくゆく岩木川に合流し、十三湖・日本海へとつながっている。

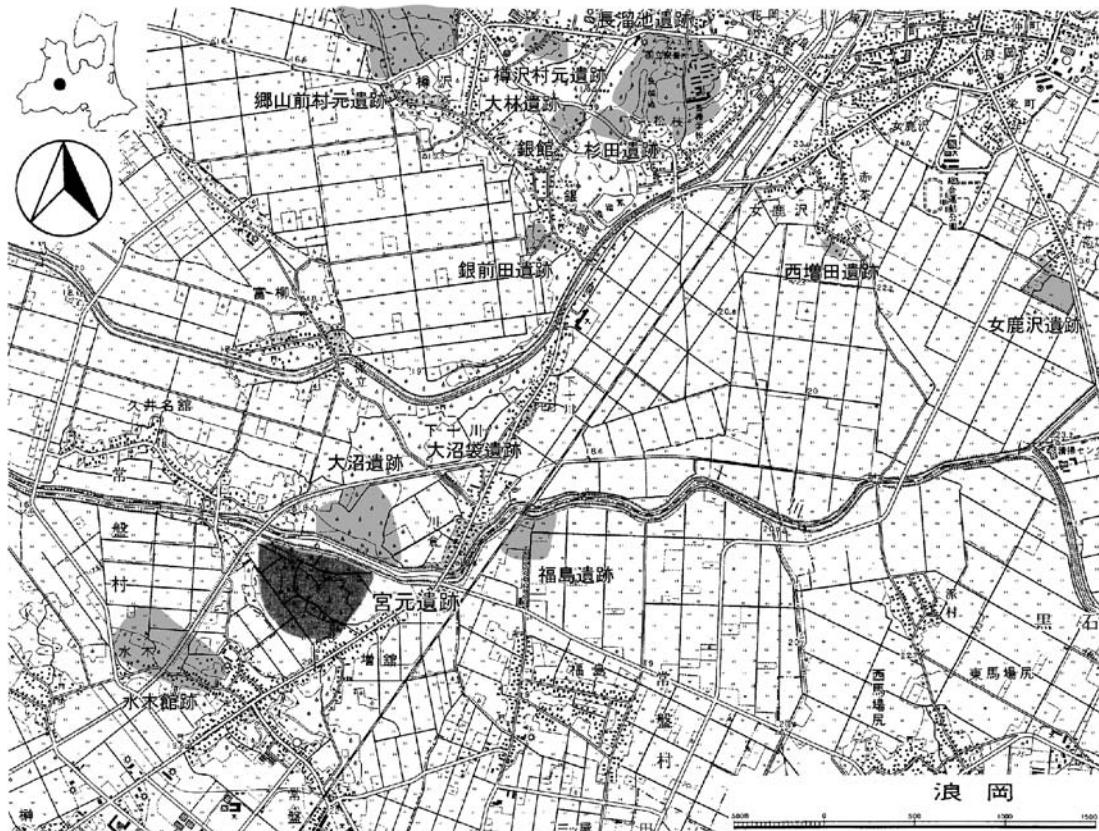


図1 宮元遺跡と周辺の古代遺跡の位置図（銀館のみ中世遺跡として登録）

宮元遺跡 調査区別の検出遺構数等一覧表

区名	調査状況	調査面積 (m ²)	住居跡	溝跡	土坑	壠立柱	ピット	ピット別	堀跡	計	出土遺物 (箱)
区	本調査	233	2	15	12		15		1	45	5
区	本調査	62	2	14	8		5			29	4
区	本調査	425	2	34	12	1	219	1	1	270	18
区	本調査	528	1	72	45		69			187	22
区	確認のみ	395		5	3		8		1	17	2
区	未調査	0								0	
区	確認のみ	270		26	12		35			73	
区	確認のみ	201		13	9		7			29	
区	本調査	353		30	25		81			136	8
区	本調査	505		17	8		5	1	31	4	
区	本調査	594		40	8		163	1	212	13	
区	本調査	272		24	28		155			207	14
合計		3,838	7	290	170	1	762	1	51	1,236	90

報告書に掲載されている表を合算・加筆したものです。

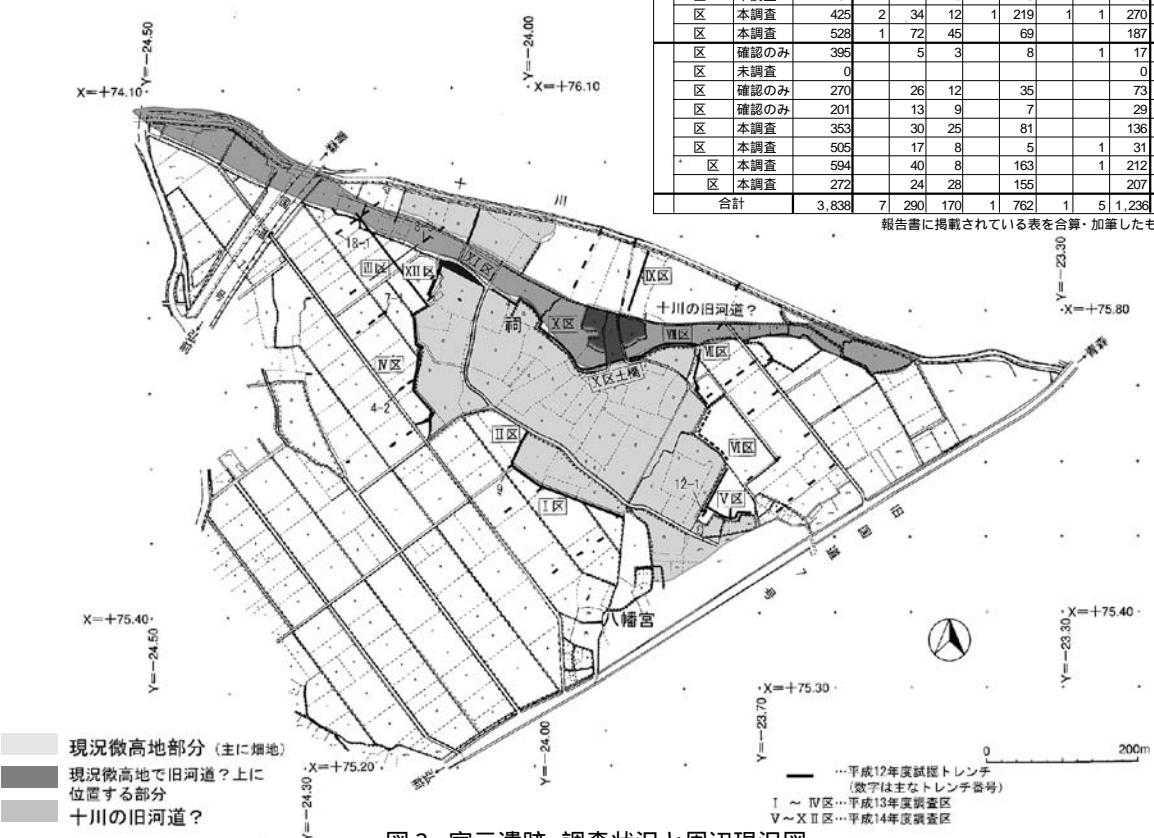


図2 宮元遺跡 調査状況と周辺現況図

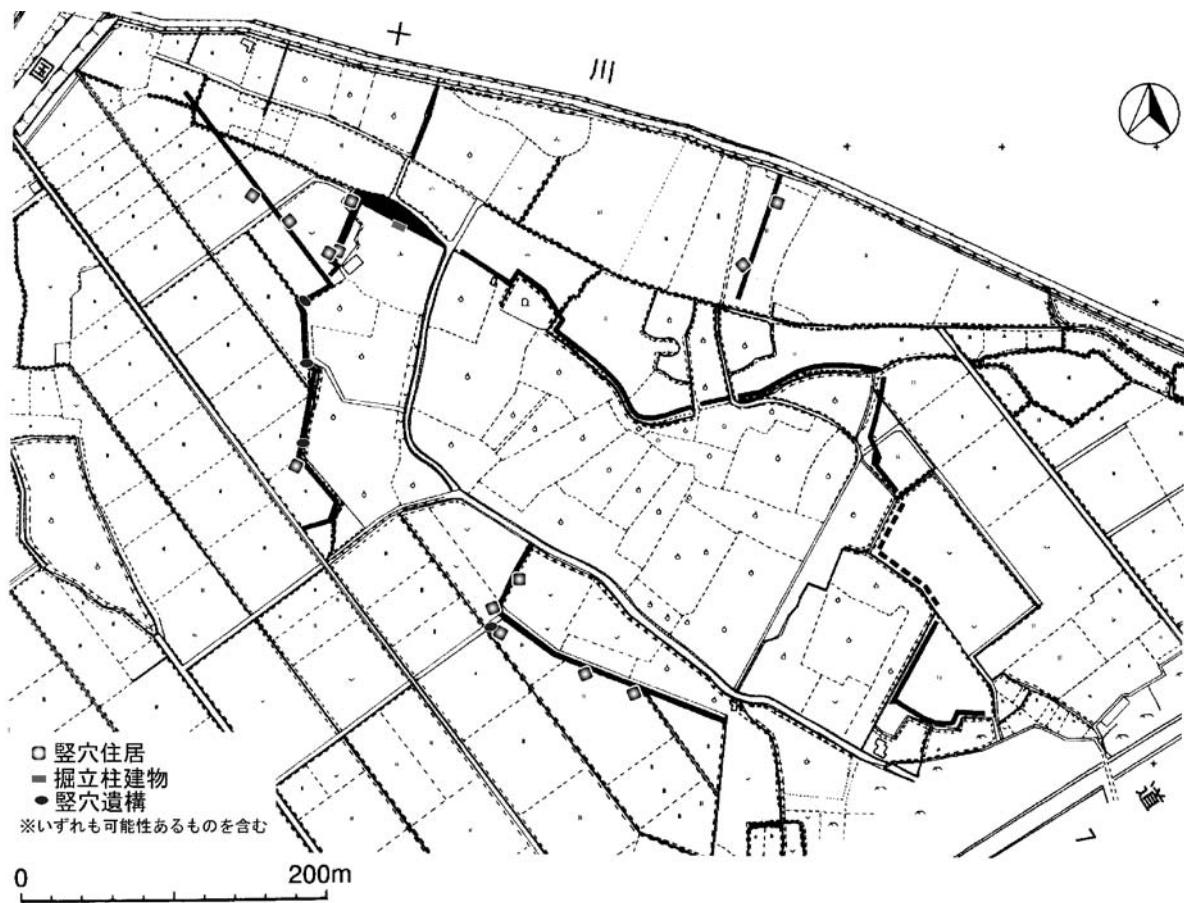


図 3 宮元遺跡 住居跡等の分布状況

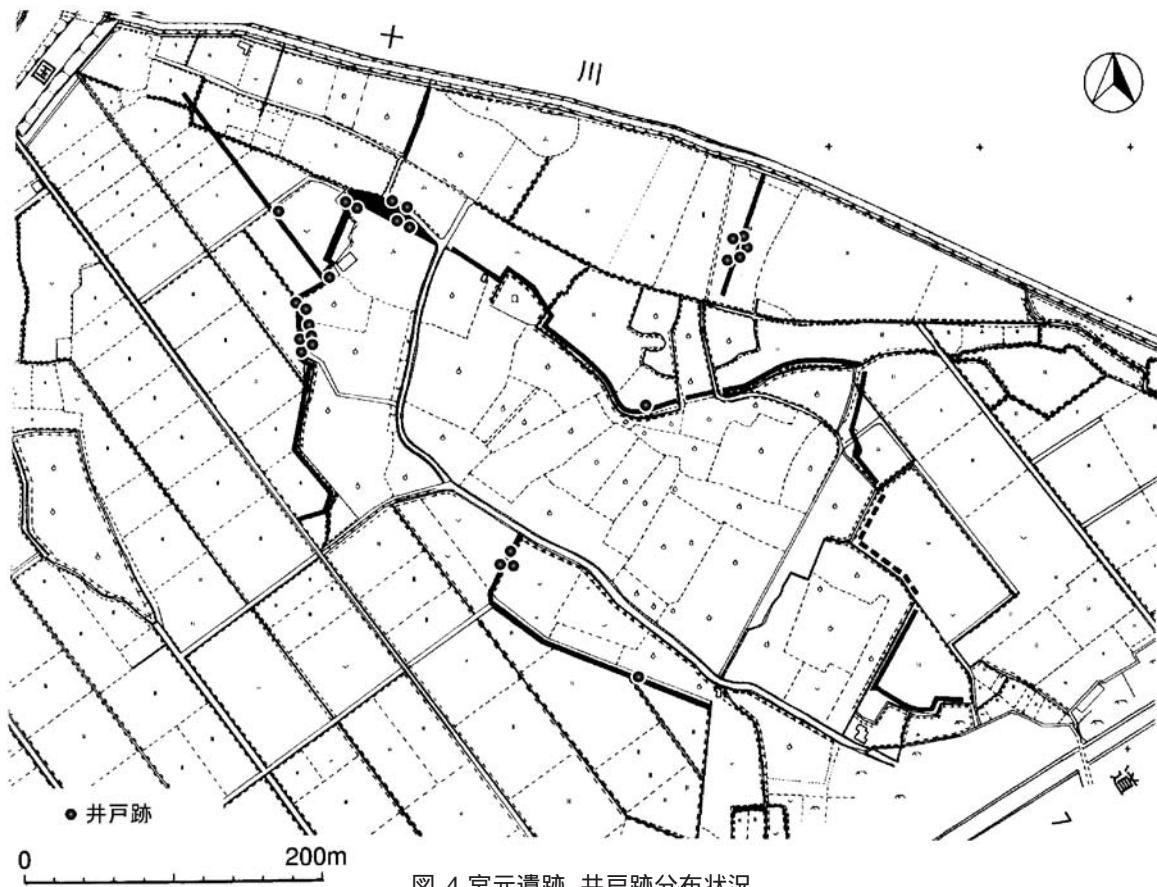


図 4 宮元遺跡 井戸跡分布状況

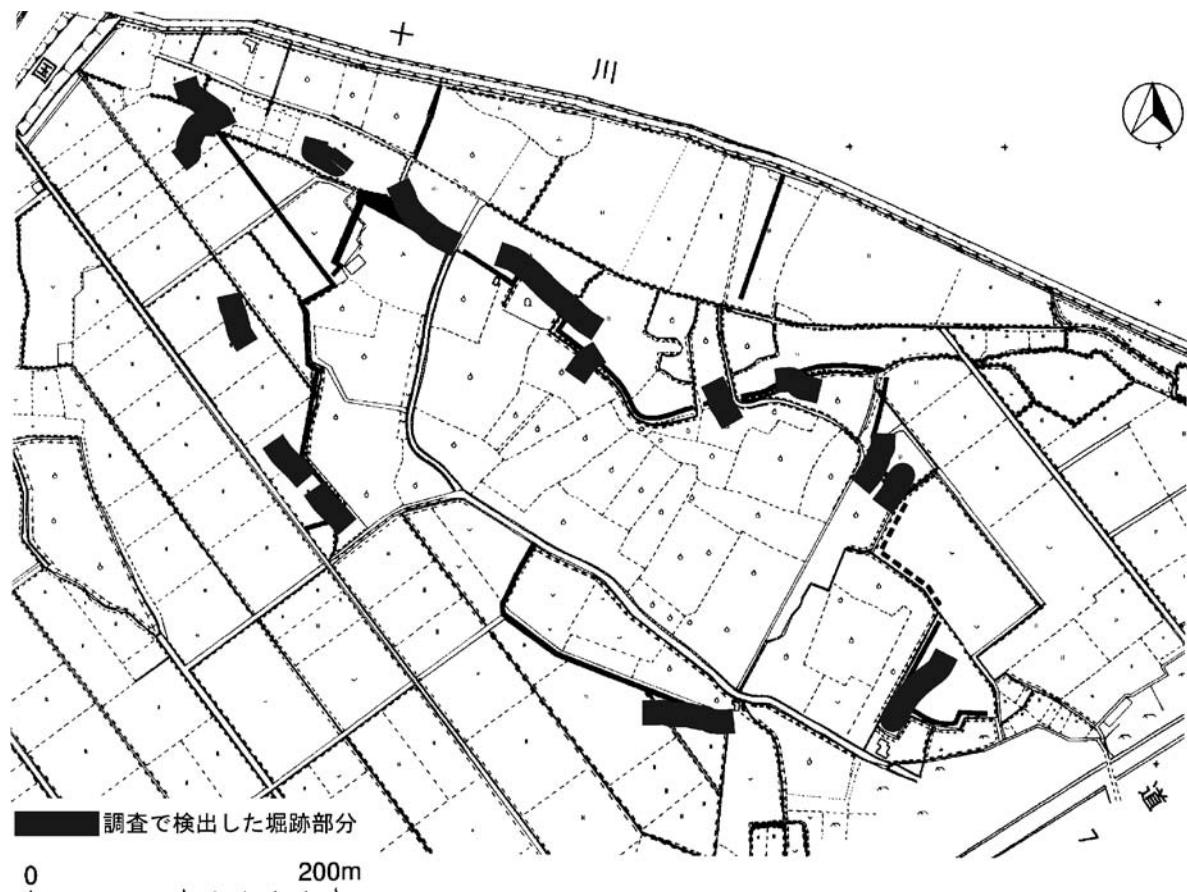


図 5 宮元遺跡 堀跡検出状況

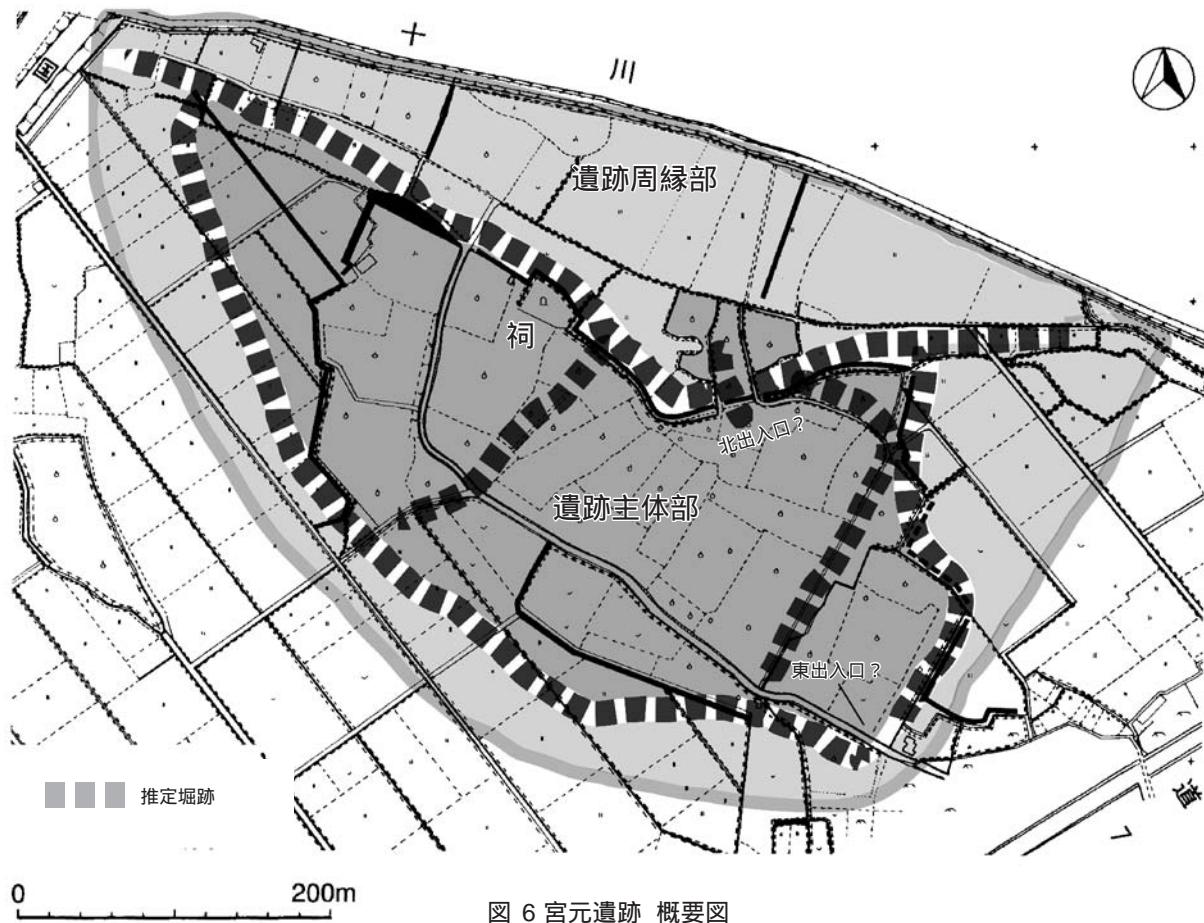


図 6 宮元遺跡 概要図

渡河のみならず、十川を河川交通として利用していたことも容易に考えられることであり、そうであれば十川の左岸に位置する本遺跡の存在意義がさらに高まることになろう。石神神社の創建期等詳細は不明であるため宮元遺跡との直接的な関わりは不明であるが、遺跡主体部と目される地点に位置し、興味深い伝承があることと考え合わせると、宮元遺跡を造営した人々と何かしらの関係があつてもおかしくないのでなかろうか。一方増館地区集落の南西部にある八幡宮の御祭神は譽田別尊で、草創建立年月不詳ながら古の伝えに依れば「正しく北畠氏の建立にして天正年間（1573～1592）、北畠大納言落城に際し、その後、増館に於いて信仰するもの也」、「天和年中（1681～1683）村中にて再建」とあることから、古代に存在した可能性は低いと考えられる。

（6）周辺遺跡の様相

本遺跡北側に隣接する「夷」の異体字が刻書された土師器が出土した大沼遺跡、本遺跡西南西約0.8kmに位置する明瞭な堀跡が地割りで確認できる水木館跡、本遺跡北東約3kmの丘陵地上に立地する古代遺跡群など、周辺には多くの古代遺跡が存在しており、さらに沖積地上には未発見の遺跡も存在する可能性が高いと思われる。当該地区での古代集落の様相は未知な部分が多く興味は尽きない。

（7）出土遺物について

古代の遺物は、土師器（壺・皿・甕・壺・堀・鉢・ミニチュア・耳皿・把手付土器）須恵器（壺・皿・鉢・壺・甕）土製品（紡錘車・羽口・土鈴）石製品類（砥石・有孔石製品・線刻礫）木製品（付札・板材・曲物・杖状・平棒状・角棒状など、穿孔・墨書含む）鉄滓・流動滓など段ボール箱約90箱分が出土した。皿付須恵器壺、外面ミガキ調整で黒色処理を施す壺、墨書・刻書土器もある。

おわりに

3ヶ年で約5,000m²の遺構確認を行い、そのうち約3,000m²を本発掘調査した。しかし本発掘調査といえどもその大半が幅約2mの水路部分のみで、遺跡の規模に比すれば不十分なトレンチ調査ともいえる状況である。今回集落の様相を提示するというよりも調査時の所感をメモ程度に連ねただけとなつたが、堀跡の配置などを図化・提示することができ、詰まっていたものがようやく取り除けた感がある。その実態は依然ベールに包まれたままだが、改めて宮元遺跡の大きさ・密度を考える機会となり、地区名である「増館」という館跡がここに存在していたものと筆者は考えている。また、昭和・平成の2度行われたほ場整備、減反政策・栽培作物変更による水田への盛土等造成によって、現在となっては地表面観察だけで古代の様相を推し量ることが非常に難しくなってしまった。本遺跡はリンゴ畠あるいは水田として耕作され、遺跡の大部分はリンゴ畠・水田の下に眠っている。宮元遺跡が壊されることなく、未永く地元の人々の生活を支えるものであつて欲しいと切に願うものである。

最後に、種々ご教授いただき叱咤激励くださいました鈴木克彦・工藤清泰・木村浩一・永嶋豊の各氏、そして発掘調査に関わった関係各位の皆様に感謝申し上げます。

引用・参考文献等

- | | | |
|----------|-------|------------------------------------|
| 青森県 | 2005年 | 『青森県史』資料編考古3 弥生～古代 |
| 青森県教育委員会 | 2001年 | 『青森県遺跡詳細分布調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第310集 |
| 青森県教育委員会 | 2003年 | 『宮元遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第359集 |
| 青森県教育委員会 | 2004年 | 『宮元遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第380集 |
| 浪岡町 | 2000年 | 『浪岡町史』第一巻 |
| 浪岡町 | 2002年 | 『浪岡町史』別巻 |
| 浪岡町 | 2004年 | 『浪岡町史』第四巻 |